

## 小・中・高教材

## 「読み深め」のための「基礎語」の指導

教科教育部 半澤正一

## 1 「基礎語の指導」意味

「ママ、ママ。新幹線の前はどっちなの。」東京駅は、新幹線ホームでのことである。5歳ぐらいの男の子が、停車している新幹線列車を見ながらつれの母親に尋ねた。母親は一瞬とまどった様子だったが、やがて列車が走り出すと、その進行方向を指さしていった。「ほら、あっちが前よ。」移動する物体の前後は、その進行方向によって決まるのだから、正に“御名答”であった。それにしても、新幹線列車のように、両方向に運転席のある車両の前後は、動き出してみるまで分らない。「一休頓智咄」の「大福餅の裏表」同様、これもまた難問中の難問だといえよう。「マエ、ウシロ」、「オモテ、ウラ」いずれも、普段何気なく使っている言葉ではあるが、ひとたび我に返って、その意味するところを現実に即して考えてみると、必ずしも易しくはない。

ところで、「語句指導」では、いわゆる難語句はとりあげるけれども、このような日常使い慣れている言葉、「基礎語」をとりあげることは少ない。しかしながら、分りきっているとは思っても、時には基礎語にもこだわってみる必要があるようだ。というよりはむしろ、こんなところにこそ、「読み深め」のための「語句指導」の新たな視野が、開けていそうに思われるのである。

大造じいさんは、思わずおどろきの声をもらしてしまいました。（「大造じいさんとガン」，光村小5・下）

例えば、この文の「声をもらし」の「もらす」について、「出す」との違いに気づかせ、「声をもらす」は、無意識につい出してしまったガンに

対する感嘆の声であることを理解させれば、大造じいさんの気持ちはもとより、ガンの様子までもとらえることが容易であろうと思うからである。

## 2 「基礎語の指導」の視点

基礎語の意味は、だれでも一通りは知っているわけだから、その指導に当たっても、単なる「辞書的意味の言い換え」などだけでは十分ではない。より厳密で的確な語義や語感の分析や考察のために、「意味の体系」を踏まえた指導こそが大切であろう。そこで、「多義語」と「類義語」の二つの視点から、「基礎語の指導上の留意点」をいくつかあげてみよう。

## (1) 多義語の場合

「ヒト」という言葉が、「人間」あるいは「他人」などの意味をあらわすように、基礎語は多義語である場合が多い。だから、基礎語の指導では、次の諸点に留意して指導すると効果的であることが多い。

- ① その語が、いくつもの意味をもっていることに気づかせる。
- ② その語のもつそれぞれの意味について、類義語、反対語をあげさせ、それぞれの意味の違いを明らかにする。
- ③ 基本的意味と派生的・比喩の意味との共通点や相違点を比較・対照して、その語の意味や語感を明らかにする。
- ④ その語のそれぞれの意味について、用例を示したり、短文を作らせたりして、その語の意味や語感をつかませる。
- ⑤ あらかじめ、多義語についての一般的知識を与えておき、その語の派生的意味はどのようにして生じたかを考えさせる。
- ⑥ その語は、辞書が示しているいくつかの意味のどの意味で用いられているか、文脈から判断させる。

## (2) 類義語の場合

基礎語の指導で、類義語をとりあげるのは、類義語間の意味や語感の重なりやずれを比較・対照し、指導しようとする語の意味や語感をよ